

欧米APT相場は高値維持で中国相場との二極化鮮明

タングステンの中間原料・APT（パラタングステン酸アンモニウム）の欧米相場は、年初の900ドル/Mtuから急騰を続け、4月には3,000ドルの大台を突破した。以降は騰勢がやや落ち着いたものの、足元でも3,100ドル前後の高値圏を維持している。中国の輸出規制の強化で原料出荷が滞る中、西側は代替調達やスクラップ回収を進めているものの、不足解消の見込みは立っていない。メーカーは受注抑制や生産調整に踏み切り、超硬製品の大幅な値上げも相次いでいる。タングステンの中間原料・合金鉄・スクラップを長らく取り扱ってきたNIC Resourcesの西野元樹社長に今年7～9月の相場見通しを寄稿してもらった。

APT相場は6月末でも3,000ドルの高値圏を維持

APT欧米相場（CIFロッテルダム/バルティモア）はピーク時からやや下落したものの、足元で2,900～3,250ドル/Mtu（中値3,075ドル）と中値ベースで3,000ドルを維持している。4月時点の相場見通し（既報・4月1日号）では、中値で2,500～3,500ドルを想定していたが、結果的に想定レンジ内で推移した。4月中旬からの中国内相場急落の影響は限定的で、引き続き高値圏を維持している。

中国内相場は乱高下でピーク時から約6割下落

中国内の精鉱・APT相場は25年8月後半から大幅に上昇を開始し、欧米相場を上回る水準で推移した。年明け以降は上昇のペースを上げながら、3月中旬には精鉱101.2万元/t（ドル/Mtu換算で約2,264ドル）、APT149.5万元/t（同2,455ドル）まで上昇。その後下落に転じ、4月中旬までは10～15%程度の下落にとどまっていたが、以降は下げ幅を拡大し5月末にはピーク時から約6割下落となる精鉱39.8万元（同888ドル）、APT64.5万元（同1,059ドル）となった。

6月に入ると需要家からの買いが増え、持ち直し、6月末時点で精鉱49.3万元（同1,118ドル）、APT74.5万元（同1,243ドル）となっている。

欧米APT相場の急騰で再び中国相場を上回る

3月中旬に中国内相場はピークアウトした一方で、欧米APT相場は2月中旬から急上昇し、3月下旬に2,650ドルをつけ、約半年ぶりに中国内相場を上回った。その後もさらに上昇を続け、5月初旬に3,140ドルをつけた。5月末から若干軟化した。6月中旬からHigh価格の上昇がみられ、足元で3,075ドルとなっており、中国相場とのかい離は拡大している。

タングステン相場は中国と欧米で二極化が進む

25年8月から欧米相場を上回る水準で推移し、欧米相場

をけん引してきた中国相場が3月後半から失速。これを受け、欧米相場の下落を心配する声も聞かれたが、結果的には影響は限定的で欧米相場は高値圏を維持している。

中国内では、APT相場はピーク時から半値以下となったが、輸出許可制度により、中国国内で値下がりしたAPTがそのまま西側へ流出することではなく、日本向けAPT・YTOの輸出はほぼ停止している。

一方、欧州・韓国向けのYTO輸出は従来に比べ半減しているものの、継続している。その輸出許可申請時の契約価格は、中国内相場ではなく欧米相場がベースとなっているため、中国内相場の下落が直ちに欧米APT相場へ波及する構造にはなっていない。

中国内相場下落で西側スクラップ滞留し価格も軟化

中国内相場下落の影響を最も受けているのは西側でのスクラップ価格である。中国内相場が欧米相場を上回っていた局面では、西側スクラップの一部が高値を求めて中国へ流れていた。しかし、現在は中国相場が欧米相場の半値以下まで下落しており、こうした動きはほぼ見られなくなった。結果として、日本を含めた西側市場にスクラップが滞留し、相場も軟化している。

ただし、西側での委託加工が可能な製錬工場はすでに処理量を大幅に上回るスクラップを受け取っており、価格の下がったスクラップがSTやAPTとして市場へ供給されるまでには半年以上を要する。こうした状況により、軟化する中国相場に対し、欧米相場は高値圏を維持している。

7～9月も欧米APT相場は高値維持する見通し

欧米相場が軟化するには西側市場での原料不足の解消が必要である。中国の輸出許可制度の運用が短期間で大きく変更される可能性は低く、西側での製錬能力の増強も28年以降になる見込み。西側市場での原料不足が解消される見通しは立っておらず、当面、中国内相場の動向に関わらず高値圏での推移が続く可能性が高い。

そのため、7～9月期のAPT欧米相場は、中値ベースで2,800～3,300ドルのレンジで推移すると予想する。